

夢は、お豆腐屋さん開店

職場
ルポ

—有限会社斉藤商店おやべ—



(文)清原れい子(写真)小山博孝



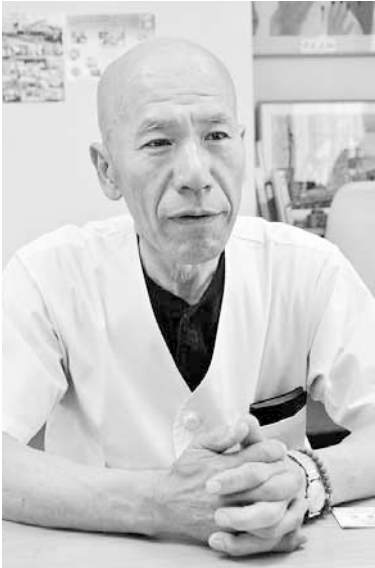
有限会社斉藤商店おやべ
〒932-0136 富山県小矢部市平田3118
TEL 0766-69-8181 FAX 0766-69-8183

■最初は息子が働く工場
いま障害者7人が働く

富山県の砺波平野は、田植えが終わったばかりの水田や麦畑が広がる。田んぼのなかの「有限会社齊藤商店おやべ」に到着すると、がんもどきを揚げる香ばしいにおいが流れてくる。工場ではがんもどきを主に、油揚げ、木綿豆腐、絹豆腐などを作っている。

齊藤商店は、代表の齊藤寛明さんが自閉症の長男、勇旗さんの働く場を作ろうと1991（平成3）年に設立した。隣の高岡市出身の齊藤さんは子育てに関わろうと会社を辞め、故郷に戻り、兄が三代目を継いだ豆腐製造を手伝ったあと、妻の明美さんの実家がある小矢部市に自らの工場を建てた。

「実家の工場で、息子が洗浄機を使って豆腐の箱を洗ったり、すしあげ（油揚



齊藤寛明代表

げ)を10枚まとめる仕事がとても早かったのを見ていました。息子が中学を卒業するまでに自分たちの工場を建てたいという夢ができて、田んぼのなかに工場と家を建てました」

最初は巾着を作った。仕入れた油揚げの中にウズラの卵と野菜の具を詰め込む。勇旗さんはその仕事得意だった。

「巾着はよく売れたので、村の人たちにパートで手伝ってもらいました。ただ夏場に仕事がなくなるので、フライヤーをもらってきて油揚げの製造を始めました」

1993（平成5）年、勇旗さんが養護学校中等部を卒業するとき、同級生と一緒に働き始めた。

「一生懸命働いてくれたのですが、冬になると手がアカギレしているのです。これではいけないと、作業施設設置の助成金をいただき、工場を増設してボイラーとコンテナ洗浄機を入れました。また、大きなフライヤーや練り機、成型機を入れて、がんもどきの生産を始めました。手のかかる商品を作らないと生き残っていけないので、いまはがんもどき作りがメインになっています」

近所から「うちの子ども」と頼まれて、知的障害のある人たちが増えてきた。現在、従業員は11人。6人が知的障害、1人が精神障害の人たちで、そのほか齊藤夫婦と次男の妻の美奈さんなど4人が働

いている。

障害者は配送に2人、がんもどき作り3人、豆腐作りに1人、商品の包装、パック詰めは勇旗さんが従事する。

■あきらめずにやらせる
怒るときは力いっぱい

齊藤さんは、幼い勇旗さんの教育に1年間徹底して関わった経験から、知的障害者の雇用で大切にしていることがいくつかある。

「それぞれの特性がありますから、一人ひとりのいいところを見つけて伸ばして、世の中の役に立つ子に育てたいと考えています。一つひとつ指示を出さないと仕事ができないこともあります。一つのことにのめりこむと雑念が入らないので、能力を見つければ、すごく伸びると思います」

「指示すると、『はい、わかりました』というので、わかったのかと思っていると全然わかっていない。それは『聞こえました』という意味だと気づきました。それからは『こうしてほしい』と指示して、『はい、こうします』と答えてもらっています。できるようになるまでに時間はかかりますよ。自分の子と同じように関わって、できないことはできるまで何年かかっても続けています」

設備を改善すれば、できるようになる



ともに作業に従事し、指導・支援にあたる齊藤明美さん（右）と齊藤美奈さん（左）

作業もある。

「工程には、機械化できるところと手をかけるところがあります。がんもどき作りは職人気質の仕事です。手の大きさが違うのでサイズがバラバラになっているのに気がつき、成型機を入れて操作を教え、大きさを統一しました。フードカッターで切っていた野菜を、いまは包丁で切っています。そこにも一つ仕事が出てきて、手を使うことで脳に刺激がいきま

す」
包丁の使い方は、齊藤さんは恐ろしくて教えられなかった。痛い思いをしなから、体で覚えることを教えたのは妻の明美さんだ。

「最初は手を傷だらけにしていた人も、8年ぐらい経ったいまは上手になって、主婦顔負けですよ。障害者だからかわいそう、できないといっていたら、できるようにはなりません。うちの子たちはものすごく叱られています、見学者の方からは『みんないい表情している』といわれます」

齊藤さんは勇旗さんに勉強を教えるとき、「単語を何回も何回も書いて覚えさせたら、あとから理解してきて、そのうちその単語の意味がわかってくる」ことを知ったという。

「詩など、意味のわからないものを暗唱すると脳に刺激を与えると知って、最初に覚えさせたのが教育勅語です。これ

は全員が2カ月で覚えしました。昨年9月からは明治維新の五箇条のご誓文を覚えていきます」

齊藤さんの指導はとても厳しいらしい。

「『もう帰れ！ こなくていい』『いや、きます』といいあっています。『不可能はない。できるまであきらめずにやらせる』がモットーですから、怒るときは力いっぱい怒ります」

厳しく指導していても、定着はいい。

「それは、働くだけではなくて、ここに居場所があるからだと思います。仕事は9時から4時半ですが、早く帰っても家族が帰っていない子もいるので帰さない。誰もいないところに戻ってもテレビを見ながらお菓子を食べるぐらいでは、ろくなことはありません」

給料は、時給700円で6時間勤務。みんな同額だ。

「最低賃金は689円ですが、計算が面倒なので700円にしています。みんな仲間だから、みんな一緒と考えています。いま、仕事の8割は障害者たちに任せられるようになりました」



具を詰め、形を整える。がんもどき作りをする片瀬郁恵さん

がんもどきの油揚げ作業をする田村進一さん（44歳）

3人が運転免許取得 学科試験が難関

仕事ができるようになるまで、知的障害の人たちはさまざまなドラマを乗り越えてきた。齊藤さんがエピソードの一端を教えてくれた。

WORKSHOP REPORT



ニンジン刻み、成型機、練り機と忙しく動き回る室崎勝弘さん（45歳）

田村進一さんは高卒後、数社に勤めたが長続きせず、作業所にいた。母親から雇用してくれないかと手紙がきた。

「ちよっと仕事は遅いけれど、真面目に仕事をするので雇うことにしました。がんと揚げでやけどしたり、野菜を刻んで指を切ったりと不器用ですが、12年間1日も休みませんでした」。この日もフライヤーで、がんとどきを次々と揚げていた。

片瀬郁恵さんは、がんとどきに具を詰めている。形を整えるのは難しいので、仕上げは明美さんたちが担当する。「好きな仕事は、がんと、巾着、油揚げを作ること。得意です」と片瀬さんはいう。

「片瀬は養護学校高等学校卒業後、自閉的な傾向が強いので、会社勤めが続かず、障害者職業センターの紹介でうちにきました。仕事が好きで、仕事を止めさせるほうが大変です。以前はコンビニでカップ麺やシュークリームを買ってばかりだったので太っていました」

室崎勝弘さんは、練り機で生地を練り、がんとどきの成型機を操作しながら、ニンジン、タケノコ、シイタケなどを刻んでいる。

「最初は、人の名前が覚えられませんでした。『あれ』とか、『おばちゃん』でし



商品の包装、パック詰め、発送準備と、さまざまな仕事をこなす齊藤勇旗さん（35歳）



た。物や人にはちゃんと名前があるのだと教えて、何カ月もかかって覚えました」朝3時に金沢卸売市場から豆腐の注文が入るため、齊藤さんと勇旗さんは、その前に起床。勇旗さんは豆腐のバットを洗ったり、翌日の作業の準備をしたりと仕事をこなす。

「勇旗はいろいろな作業ができます。



みんなの家

家族の玄米ご飯を炊くことも、料理もできますよ」

勤め始めてから運転免許を取った人が3人いる。第1号が堀田圭祐さんで、毎日商品を配達している。

「養護学校卒業後、作業所からうちに移ったのですが、掃除をさせると『汚い仕事は嫌だ』というし、『休憩は？ お茶は出ないんですか？』という。工場で働くのは向いていないので、無理をしても免許を取らせようと思いましたが。地図を覚えて配達ができたなら、ほかでも仕事ができますから」

堀田さんは、自動車運転の実技試験は通ったが学科試験が通らず、やる気をなくした。どうしたらいいかと考えた齊藤さんは毎日終礼を行うことにして、学科試験の問題を2題覚えてくるよう命じた。堀田さんがその2問を質問して、オートバイに乗ってきていた田村さんに答えさせた。

「そのころに覚えさせたのが教育勅語でした。こんな難しいことを覚えられるのなら、学科試験は簡単だから受けてこいといったら、それまで85点だったのが90点以上で合格したのです」

次に挑戦した田村さんは3〜4カ月で合格した。「でも不器用で、隣に乗っていると怖いんです(笑)」

3番手の山田健太さんは、養護学校3年のときに採用を内定し、在学中に自動

車学校に通ってもらった。

「実技は4月に通ったのですが、漢字が苦手です。夏に89点までに行き、その後ずっと89点で1点足りない。ある会合で励まされたのを機に初めて自分から勉強して、約1年後の3月に合格しました。山田は運転センスがすばらしい。場を読むことができるので、一緒に仕事をするのが楽ですね」

配達から戻ってきた山田さんが笑顔で答えてくれた。

「配達を始めて3年半で、1日に8〜10軒に配達しています。免許を取るの大変でした。道を覚えるのも初めは大変でした。配達では事故がないように、安全運転に気をつけています。そして、「ここで作っているものは全部おいしいです」と付け加えた。

雇用の枠を超えて 知的障害者の自立を支援

齊藤さんは働いている人たちの自立支援にも力を入れ、2009年にNPO法人「ゆうきの会おやべ」を設立した。会の名前には、「勇旗」と「勇氣」と「有機」栽培の野菜作りをしたいの思いを



車を運転して配達する山田健太さん(23歳・右)と堀田圭祐さん(26歳)

込めた。料理、洗濯、掃除などの訓練にも取り組み、絵画や書道教室も開いている。

「父親のいない子は、主人のなかに父親像を見ているのではないかと思います。経営者というより教育者ですよ」と明美さん。体重管理も厳密で、毎日朝と夕方に体重を計る。その数値をホワイトボードに書き込み、月1回発行の「ゆうき」に載せる。

「みんなが太ってきたので始めました。仕事の前後で、多い人は2キロ減ります。体重の差が仕事だよと話しています。どこかでお菓子を食べるとすぐばれる。山田は10キロ以上増えたので、目標を決めて84キロ台まで減らしました。続けないと効果は出ませんね。12年間1日も休まない田村はずっと健康体重です」

昨年10月、考えたうえで就労継続支援

WORKSHOP REPORT

「みんなの家」で練習するメンバー。みんな音楽が大好きで、チャリティコンサートなどに出演の経験もある。齊藤代表のサクスがシブい



A型事業所になることを決めた。

「福祉の事業には若い職員が入ってくれます。いままでは私たちが元気で働けたからいいのですが、後継者を育てることを考えたら、そちらの方向に進んだほうがいいのではと、県の障害福祉課に相談に行きました。将来は、自分たちで自立して生活してほしい。住まいを作って、ここを拠点にいろいろな会社に通勤できればいいですね。A型事業所を卒業したら齊藤商店に勤務する形になればと思います」

また昨年、集会や宿泊ができる、ホームエレベーター付きの「みんなの家」を工場敷地内に自力で建てた。20年の実績で地域から反対の声はなく、村の人たちとの交流の場にもなっている。

「いずれ親は亡くなるので、きちんと生活できる環境を整えてやりたい。そのためには訓練の場が必要ですので、みんなの家をつくりました。いろいろな人たちがきてくれて、交流ができています」

さらに地域に溶け込んでいこうと、工場周辺の道路の掃除も始めた。村の人たちが「ご苦労さん」と声をかけてくれる。「ビニールハウスの跡地で、畑をしない？」という話もきて、ジャガイモを

植えた。隣接する公民館の三世交代交流会で豆腐を作り、夏にはカレー祭り、秋にはそば打ち、鍋祭りを行い、1月にはみそ作りもする。公民館の花壇も造っている。

「父親」として自立を促す

「障害のある従業員本人に夢を語らせて、その夢を実現すること」が、自らの夢だという齊藤さん。工場を作って22年。工場の仕事と配達を担う、みんなの夢を聞いた。

齊藤勇旗さんは「スリムになり、父母と一緒に旅行がしたい」

田村さんは、「自分の畑で大豆を作って、豆腐を作り、インターネットで販売したい」

片瀬さんは、「給料は貯金。あこがれの人と結婚したい」

室崎さんは、「新築した自宅で、どんな料理でも作れるようになりたい」

山田さんは、「サクスを吹けるようになるって、全国で演奏したい。大型バスの免許をとって、みんなを乗せたい。石動でお店を出したい」

堀田さんは、「パソコンで自分のホームページを立ち上げたい」

お父さん役の齊藤さんが信念をもって突き進み、お母さん役の明美さんが温かくフォローする。勇旗さんにはサラリー

マンの弟が2人いて、次男の妻の美奈さんが昨年9月から働き始めた。小さいころから勇旗さんを知っていたそうだが、笑顔で自然に職場に溶け込んでいる。「美奈さんは子育て中ですから、対応が上手。すごい戦力です」と明美さん。

齊藤さんは将来、山田健太さんに豆腐店を開かせたいという。「はい、できそうです」と山田さんが応える。

「健太はいま5年目。あと5年したら、仲間と豆腐屋さんが開けるといい。堀田圭祐は運転が得意だから、健太がつくった豆腐を配達できたらいい。それが夢です。また、体を使うことをいとわないので、高齢化している村の農業に携われればいいと思っています。村の人たちがお年寄りから子どもまで参加する祭りも開きたいですね」

齊藤さんは「父親」として、みんなに自立を促す。

「お金を貯めて、自分たちの家を自分たちで作れ。自分たちでやれるだけやって、足りないところは頼めばいい。その家ができたなら、日本中から見学にくるぞ！」

就労継続支援A型事業所への選択は、将来を見据えれば、齊藤商店の場合も必然のような気がした。知的障害者たちの地域での自立を願い、これからも挑戦が続く。